

介護老人保健施設しおさい

症 例 概 要 利用者氏名：Y・S様（90代 女性 要介護2）
利用期間：令和元年6月～入所を利用（訪問リハ：平成30年1月より週1回利用）
病名：第10肋骨骨折
既往歴：両変形性膝関節症・高尿酸血症

経 過：平成31年4月独居生活中に自宅で転倒され西伊豆健育会病院へ救急搬送となり肋骨骨折の診断にて入院される。症状改善したがご家族は独居生活を心配され令和1年6月中旬ご入所となる。

内 容

ご入所当初のYさんはN病院より自宅に退院出来ると思っており、「私をだまして施設に入れた」「家に帰ることが出来ないのなら死んでもいい、帰らせるつもりがないなら私の前に来ないで」と、ご家族と喧嘩をしてしまい、ご家族も「面会にはきません」と泣いて帰ってしまいました。

帰宅したい思いが強く職員に「タクシーを呼んでください。私、家に帰ります。」と毎日何度も訴え、クローゼットの荷物もいつでも帰ることが出来るようにまとめていました。

職員は傾聴するも居室で過ごされる事が多く、食事、入浴などの声かけをしても拒否が多く聞かれ、あまり居室から出てくる事はありませんでした。

そこで、ただ帰宅願望が強いだけではないのではないかと理由を理解するために何度も傾聴していくと、僧侶の妻として長年に渡り寺院を守っていたYさんは、寺院のことが気になり、「家が心配だから、家に帰りたい。檀家の方がお寺に来るからお寺をきれいにしておきたい」と、ご自分の体の心配よりもお寺の心配をされていました。

また「ずっと一人で暮らしてきたから大丈夫」とご自分の転倒後の体の変化を受容出来ていないと感じ、転倒前から訪問リハビリをご利用されていたことからPTに協力してもらい、

今は車椅子での移動がメインであり、アームウォーカーで10m歩くのがやっとなのだと まずは身体状況の受容をしていただき、そこから目標を①リハビリを頑張り、アームウォーカーでの歩行を安定させる。②入所生活になれていただく。ということから始めました。

各部門がYさんの思いに添えるようカンファレンスで話し合い、こつこつと継続したところ「衣類の整理がうまく出来なくて」「お風呂は嫌いではない、人に見られるのが恥ずかしくて」とご自分からお気持ちを話して下さるようになり、初めての入浴後には、「久しぶりにお風呂に入ってさっぱりした、ありがとうございます。」と喜んでおられました。入浴された以降は「今まで一人で暮らしてきたけど、今はみなさんがご家族のように良くして下さり、心地いいです」と言って、日課に合わせ、食堂で過ごすなど、他者と交流されたり、自ら集団体操に参加するなど、入所当初に見る事の無かった、最高の笑顔を拝見することができました。

また僧侶の妻でお寺の事を陰ながら支えてこられたYさんらしく周囲の利用者さんの心配をするなど優しい姿が度々見られるようになりました。

ご家族は当初喧嘩をした以降、ご面会がなかったため、その間は職員がお電話でYさんのご様子をお伝えし、Yさん・ご家族双方のお気持ちが落ち着いたところでご面会をセッティングしたところ、お寺の心配がないことや、ご家族が不安と感じていたことなどお互いの気持ちを分かりあい和解することが出来ました。

またご家族はとてもいい笑顔で入所生活を送っているYさんを見てたいへん喜ばれておりました。

今ではYさんはこれまでお部屋に飾られていた観葉植物をみんなで楽しみたいと食堂へ運びお世話をしてくださるなど「一人で生活するより、ここには同級生もいるし、家族以上にみなさんがみて下さるので、ここで大家族のように生活したいです」と、しおさいでの生活を気に入っておられます。一度は家で暮らせないなら死にたいとの絶望を感じたYさんが新しい家族を感じ、毎日を笑顔で過ごし、輝きの日々をお送りいただける症例となりました。